

手取りも増やす夏にしよう

ながれ

仲亀 壮流 (なかがめ たける / 元インターン生、会社員)

2021年度に環境文明21でインターン活動をし、早いもので社会人4年目となりました。私事ですが、今年の5月に転職・6月からは実家を離れて一人暮らしを始めるなど、新しいことばかりで慌ただしい生活を送っております。そんな中でも社会の変化は著しく変化しており、環境に関わるニュースだけでも、トランプ大統領の就任に伴う米国環境政策の転換、美浜原発での原発新設に向けた調査の着手など一市民として熟考すべきテーマは少なくありません。今回、参院選の終わった7月の暮れに、環境・社会に対する所感を率直に書き綴りたいと思います。

今回の参院選は物価高対策が争点となり、環境政策への議論には及びませんでした。「減税か給付」という短期的な視点での議論が先行し、長期的な視点を持った政策論争とは一線を画す展開となったため、「バラマキ論争」などと揶揄されました。①減税あるいは給付による効果、②減税・給付額の妥当性、③それを担保する財源の在り方の丁寧な説明を以って、ベターな政策であることを説明する必要があったかと思います。というのも私自身、「もらえるものはもらうに越したことはない」「自分だけが損したくない」と投票にあたって、いささか邪な感情が脳裏をよぎったからです。環境政策と長期的な視点というのは切っても切れない関係性であることは承知していますが、こうした私欲が長期的な視点で考えることへの足かせとなっているのかもしれない。

また、10代・20代の投票先として国民民主党・参政党が台頭し、既存政党の支持離れを示す結果となりました。各種利益団体や政

治に関心のある層とは異なる、新たな層を発掘したかのようにも思えます。事実、生活に直結する身近な話題も多かったこともあり、私の友人や同僚の間でも政治の話題が増えたことを痛感しました。10代・20代は政治に無関心であることが常套句とされてきましたが、こうした変化は前向きに捉えられる一方、一度盛り上がった熱気が冷めるには時間を要するのは事実です。

そして、一度恩恵を受ければ、「もっと欲しい」とおかわりを求めるのは想像に容易く、次回の選挙でも似たような展開になるのではと危惧しています。極論、利己主義も数が増えれば民意になることを再認識しました。限られたパイをどうやって分配するかを決めるのが政治とするならば、どうすれば環境政策の優先順位を上げることができるか、ぜひ皆様のご意見を伺えればと思います。市民の生活に直結するということが認識されれば、おのずと市民の行動も変わるはずですが（とはいえ、危機感を煽るのが正解なのか、取り返しのつかない地点に及ばないと動けないのかなどモヤモヤは残りますが...）。

最後に、大学生の頃と比較すると「社会のあるべき姿や将来」といった大きなテーマを考えることや議論することが少なくなりました。今回の寄稿で久方ぶりに考える機会を頂けたことに感謝します。また、今年の抱負として一つ環境系のテーマを絞って、しっかり自分ごととして考え、アウトプットしたいと思います（何事も宣言した方がお尻に火がつきますので...）。